

原子力災害を

ShiruManabu

シル・マナブ

2020年度版

2020.11/7-12/26

理想に描く未来。
実現に向けて
出来ることは何か

震災から10年目の今..



〔座談会〕 福島のと未来に私たちが向き合う

■ インタビュー

● お茶農家 松本 和也さん ● 漁師・語り部 杉本 肇さん

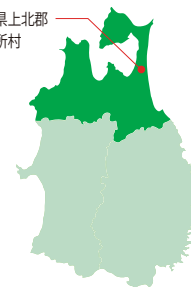
■ 学びの旅は続く 世界の扉を開く

原子力災害をShiruManabu [シル・マナブ] 2020年度版

企画 発行 特定非営利活動法人ハッピーロードネット
制作 ふくしま浜通りHIGH SCHOOL ACADEMY有志

2021年夏、浜通りの高校生対象の青森県六ヶ所村訪問研修、参加者募集!

青森県上北郡
六ヶ所村



ふくしま浜通り HIGH SCHOOL ACADEMY 2021 開催

特定非営利活動法人ハッピーロードネットでは福島県浜通りの高校2年生を対象とした六ヶ所村研修を夏に計画しています。

訪問先の一つである日本原燃株式会社は、使用済核燃料の再処理や低レベル放射性廃棄物の埋設など核燃料に関する事業を行っています。また、六ヶ所村は「次世代エネルギーパーク」を整備し、次世代エネルギーのあり方について国民に理解を深めることを目的に、全国から人や産業が集まることで地元の観光・地域振興に結びつけています。

現在、浜通りが抱えている「廃炉」と「まちづくり」の課題について知り、先進的取り組み地域での研修を通して、福島の未来について考える機会となります。ご参加お待ちしております。



主催 特定非営利活動法人ハッピーロードネット
事務局 特定非営利活動法人ハッピーロードネット

〒979-0407 福島県双葉郡広野町広洋台2丁目1-5 E-mail office@happyroad.net
TEL: 0240-23-6172 080-6014-4372 (携帯電話)

P3~P4 入り交じる爪痕と再生 震災 10 年目の被災地を歩く

P5 風評に立ち向かうために

P6 復興を考えるためのキーワード

P7~P14 **座 談 会**

● **福島のと未来に私たちが向き合う**

福島第一原発の廃炉への道のりは長く険しい。
若い世代が古里の復興のために何が出来るかを考えた



P15~P16 インタビュー……(1)
お茶農家 松本 和也 さん



P17~P18 インタビュー……(2)
漁師・語り部 杉本 肇 さん



P19 お茶農家 松本 和也さんの話を聞いて

P20 漁師・語り部 杉本 肇さんの話を聞いて



P21~P22 公害の原点を知る 歴史と歩みを学ぶ

P23~P24 学びの旅は続く 世界の扉を開く

P25 これから

P26 編集後記



**震災後10年目の今
福島の未来に！
私たちが向き合える事**



酒井 郁澄 (19) 秋田大学

真田 未夢 (18) 仙台青葉学院
短期大学

山田 玲華 (19) 福島大学

古橋 滉 (18) 新地高等学校

清信 早希 (18) 相馬高等学校

荒川 礼奈 (17) ふたば未来学園
高等学校

田中 愛琉 (17) ふたば未来学園
高等学校

阿部 稜己 (相馬高等学校)

柚原 花音 (原町高等学校)

政井 優花 (ふたば未来学園高等学校)

笠井 智貴 (磐城高等学校)

大山 凜 (相馬高等学校)

齋藤 叶 (相馬高等学校)

古内 千聖 (ふたば未来学園高等学校)

横山 天 (磐城高等学校)

金成 笑来 (磐城桜が丘高等学校)

脇坂 大輝 (相馬高等学校)

中里 友香 (相馬高等学校)

秋山 奏夢 (磐城高等学校)

荒 竜馬 (相馬高等学校)

森 聖愛 (原町高等学校)

渡辺あさひ (ふたば未来学園高等学校)

吉田 乃愛 (磐城桜が丘高等学校)

入り交じる爪痕と再生 震災10年目の被災地を歩く

2011年3月11日に起きた東日本大震災、東京電力福島第一原発事故※1から10年。節目へ向かい復興の課題を伝える新聞報道やテレビのニュース番組を目にする機会が増える中、私たちはふと思った。「双葉郡の現状を自分の目で確かめたことはあっただろうか」。未曾有の災害が起きた当時、まだ幼かった私たちは将来の復興を担う世代へと成長していく。課題を深く見つめ、古里の未来と真剣に向き合いたい。そう思い立ち、実際に双葉郡を歩いた。

① 想像を超える人の多さ…実態は？

最初に訪れたのは、2017年4月に避難指示※2が一部を除き解除された富岡町。主要道路の国道6号は「環境省」のステッカーを付けた大型トラックがひっきりなしに行き交う。避難指示の解除に合わせて町が開設したという商業施設の駐車場は買い物客の車で埋まっていた。想像を超えるにぎわいぶりに驚いていると、ある住民がつぶやいた。「買い物客の多くは外から来た復興作業員。元々住んでいた住民の多くは戻っておらず、週末は閑散としているんだ」。

② 生活基盤は避難先に

富岡町では、震災前の人口約1万6千人のうち1割程度に当たる約1500人しか戻っていないという。避難生活が長引く中で、避難先で就職が決まったり、子どもが進学するなど生活基盤が移り、古里に帰りたくても帰れない状況に直面していることも帰還の動きが鈍い要因の一つのようだ。事故から10年を迎え、今も避難を余儀なくされている。

る住民が抱える課題は個別化し、複雑さを増していた。



バリケードが設置され立ち入りが制限されている帰還困難区域

③ 今も残る帰還困難区域

国道6号を北上し、大熊町を訪れた。道路沿いに屋根が崩れたままの家屋が並び、玄関先に高さ2メートルほどのバリケードが張り巡らされていた。人の立ち入りが今も制限されている帰還困難区域※3だ。帰還困難区域の避難指示が解除されな



汚染土壌が運び込まれる中間貯蔵施設

ければ、住民はかつての生活を取り戻すことはできない。一方で、帰還困難区域の中でも、先行的に除染やインフラ復旧を進め、人が再び住めるよう整備する特定復興再生拠点区域(復興拠点)※4があることも知った。まずは復興拠点の解除に向けた動きの加速化が、地域再生の足掛かりになるのだろう。

④ 失われる原風景

福島第一原発に近づくと、見渡す限りの黒い袋の山が目飛び込んできた。県内の除染で出た土などを運び込む中間貯蔵施設※5だ。16平方キロメートルに及ぶ広大な敷地には、かつて田畑が広がり、子どもたちの元気に遊ぶ姿があったはずだ。生まれ育った自宅にさえ自由に帰ることができない人がいる。そして、汚染された土壌が置かれ、失われた古里の風景をどう取り戻していくのか。私たちの世代も将来の復興を考える上で避けては通れない課題だ。

いよいよ福島第一原発に入る。「大丈夫なのか？」。そんな不安を抱いていたが、敷地内に防護服を着た作業員の姿は少なく、私たちも私服でバスに乗り構内を巡った。東京電力の担当者からは「敷地内の大半の放射線量は事故当時よりも大幅に下がり、一歩ずつ廃炉へ歩んでいる」という説明を受けた。

⑤ 間近で見た廃炉の課題

ただ、報道に接すると、事故により溶け落



復興へと歩む力強さを感じさせる壁画アート

ちた核燃料(デブリ)※6の取り出しは現時点で困難を極め、廃炉に向けては前例のない最大の課題だと報じていた。国や東京電力は世界の英知を集めて乗り越えようと挑戦しているようだ。必ず成功に導いてほしい。

敷地内では、放射性物質トリチウム※7を含む処理水※8と対面した。今は敷地内のタンクで保管しているが、2022年夏ごろには保管容量が限界に達するという。2021年1月上旬現在で、濃度を薄めて海や大気中など環境中に放出する案などが検討されているようだ。

⑥ 諦めず前へ進む

「HERE WE GO!!!」。大熊町の北に隣接する双葉町も訪れた。双葉駅前にある壁面には「ここから前へ進む」という強い決意が込められた英文が記されていた。

双葉駅は2020年3月のJR常磐線の再開通※9に合わせて、新しく生まれ変わった。ただ、周囲には屋根が崩れたままの家屋が点在し「あの日」から時計の針が止まったままの光景も残る。そんな中で、壁画アートからは復興へ歩もうとする住民の力強い意志が感じられた。今も全町避難を余儀なくされている双葉町。再生の力になりたい。私たちに出来ることを模索し続けたい。



生まれ変わった双葉駅

復興を考えるためのキーワード

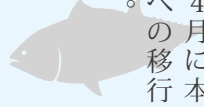
根強い風評被害（※10）をどう払拭していくか。復興の大きな課題だ。仮にトリチウムを含む処理水が環境に放出されれば、風評の拡大は避けられないだろう。現地視察を終えた私たち高校生は、どう立ち向かっていけばいいのかと考えを巡らせた。まずは、これまでに直面した主な風評被害を調べてまとめた。

風評に立ち向かうために

身の回りにおける風評被害の具体例は？

漁業

試験操業（※11）による2019年の魚の水揚げ量は3640トンで震災前の1割強にとどまっている。本県沖で獲れる魚は「常磐もの」（※12）と呼ばれ、高い人気を誇った。県漁業協同組合（県漁連）は厳格な放射性物質検査（※13）を行っているが、それでも消費者の十分な「安心」の確保にはつながらっていない。県漁連は今年4月に本格操業（※14）への移行を目指している。



農業

例えば、福島県を代表する農産物の一つのコメを取り巻く環境もいまだに厳しい。全量全袋検査（※15）では、2015年産米から基準値超えゼロが続く。にもかかわらず、農家からは「取引価格は震災前の水準まで回復していない」と嘆きの声が続く。



人権

ある県民の婚約者の父親が「福島県民とは結婚させられない」と言い放ったというニュースが今も忘れられない。避難している子どもも「福島に帰れ」「放射能がうつる」など差別を受けたようだ。コロナ禍に直面し、目に見えない恐怖に対する差別や偏見が横行していた原発事故直後を思い出す。



※1 東京電力福島第一原発事故

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、高さ10メートルを超える大津波が福島第一原発を襲った。原子炉6基のうち1〜5号機で全交流電源を喪失。原子炉や使用済み核燃料プールを冷却できなくなった。運転中の1〜3号機で炉心溶融（メルトダウン）が起き、1、3、4号機の原子炉建屋が水素爆発で損壊した。事故の国際評価尺度はチェルノブイリ原発事故と同じ最悪のレベル7。

※2 避難指示と避難者

福島第一原発事故を受け、国は原発周辺など11市町村に避難指示を出し、それ以外の地域でも放射線被ばくを懸念した自主避難が相次いだ。東日本大震災と合わせた避難者は最大で16万人を超えた。除染や生活インフラの復旧が進み、避難指示は順次解除されているが、避難生活の長期化に伴い帰還を諦める人も多い。

※3 帰還困難区域

東京電力福島第一原発事故による福島県内の避難区域のうち、放射線量が年間50ミリシーベルトを超えた地域で、避難指示は7市町村で継続中。今も立ち入りが制限されている。

※4 特定復興再生拠点区域（略称：復興拠点）

帰還困難区域内の一部に除染やインフラ復旧を一体的に進め、再び人が住めるよう整備する地域。2022年春から23年春までに避難指示を解除される見通し。当初は放射線量が年間20ミリシーベルト以下となるのが確実なことで、除染の進展と生活に必要なインフラやサービスがかわる復旧すること、地元との十分な協議を解除の要件としてきたが、国は地元の要望を前提に年間20ミリシーベルトを下回れば除染をしなくても避難指示を解除できるようにした。

※5 中間貯蔵施設

双葉、大熊両町にまたがる福島第一原発の周囲に整備中で、面積は約16平方キロ。最大で約2200万立方メートルの汚染土壌などを保管する。施設の目的はあくまで「中間貯蔵」で、国は県外に最終処分場を造り、2045年3月12日までに処分を完了することを約束している。しかし、県外処分のめどは立っていない。

※6 溶け落ちた核燃料（デブリ）

6基ある第一原発のうち、原発事故で核燃料が溶けた1〜3号機に存在する。燃料を覆っていた金属製の管や原子炉格納容器のコンクリート材などと混ざり、強い放射線を出している。

※7 トリチウム

水素に性質が似た放射性物質。半減期は12.3年で、自然界にも存在する。水に含まれていると除去するのは困難。放射線のエネルギーは弱く、紙一枚でも防げる。

※8 処理水

福島第一原発で発生する汚染水を多核種除去設備（ALPS）で浄化した水。ALPSでは62種類の放射性物質の濃度を下げられるが、水とほぼ同じ性質の放射性トリチウムは浄化できない。トリチウムを含む処理水は他の原発では濃度を薄めて海に流しており、福島第一原発でも事故前は海に放出されていた。

※9 JR常磐線の全線再開通

震災と原発事故後、鉄道設備の被災や避難指示の影響で不通となっていたが、2020年3月14日、9年ぶりに全線での運行が再開。復興のシンボルの一つとされている。

※10 風評被害

根拠のない噂により経済的な被害を受けること。本来は「安全」な商品が危険視され、避けられる傾向が強い。

※11 試験操業

県漁連が原発事故の翌2012年から魚種や海域を絞って開始した。小規模な操業と販売で、出荷先での評価を調査することが目的。

※12 常磐もの

福島県沖は親潮と黒潮が交わる豊かな漁場で、そこで育まれた魚介類は首都圏の市場などで高く評価されてきた。関係機関はブランド化し、消費拡大を図っている。

※13 県漁連の放射性物質検査

国が定める放射線物質の出荷制限基準値は1キロ当たり100ベクレル。一方で、県漁連は安全性を担保するため、さらに厳しい独自基準として1キロ当たり50ベクレルをクリアした魚だけを出荷している。

※14 本格操業

水揚げ量を増やし、原発事故前のような本格的な漁の形に戻すこと。ただ、どのような指標を使って現在行われている試験操業と区別するかは、必ずしも明確にはなっていない。

※15 全量全袋検査

原発事故後、福島県産のコメに対する消費者の不安を取り除くため、県内で収穫される全てのコメを対象に2012年夏から始まった放射線物質を測定する検査。

福島は今と未来に私たちが向き合う

座談会



復興へ向かう道の先には、長く険しい福島第一原発の廃炉やそれを担う人材の育成、原発に代わる新しい産業の創出、根強い風評の払拭など世代を超えた課題が横たわる。将来を担う若い世代7人が座談会を開き、古里の未来像について語り合った。

【座談会出席者】

- ・酒井 郁澄(19) / 南相馬市出身
- ・真田 未夢(18) / 南相馬市出身
- ・山田 玲華(19) / いわき市出身
- ・古橋 湜(18) / 新地町出身
- ・清信 早希(18) / 相馬市出身
- ・荒川 礼奈(17) / 広野町出身
- ・田中 愛琉(17) / いわき市出身



当時の混乱を物語る双葉南小学校

絆つなぐ取り組み必要

―被災地を訪れて感じたことは？

荒川 震災前によく遊びに行っていた浪江町の祖母の家の周辺は、多くの家屋がなくなり街並みが変わってしまっただ。懐かしい風景が失われてしまったのが残念でならない。



り、当時住んでいた家は全壊した。跡地には今、太陽光パネルが並んでいる。再生可能エネルギーの導入が進むことは歓迎するが、正直、複雑な思いもある。

古橋 今も住民が避難を余儀なくされている双葉町の小学校を訪れた



津波被害からの再生に向け、新たなまちづくりが進む広野町

そのものだ。それが突然奪われ、着の身着のまままで避難を余儀なくされた住民の心情を察するといたまれられない気持ちになる。

清信 それでも、前を向いて歩む住民もいる。私も参加している国道6号に桜を植樹する活動には、避難先から多くの人が集まる。住民が再び古里に足を運ぶきっかけとなり、絆をつなぐような活動がもっと活発化すれば、震災や原発事故で分断された地域の再生につながる力となる。

が、時計の針が止まったままだった。黒板に記された文字や床に張り付いた日記が当時の混乱ぶりを物語っていた。



真田 そうだね。私も小学3年生の時に震災があ

あらかわ・れな ふたば未来学園高校在学。2020年の双葉郡研修事業に参加

田中 生まれ育った家やその周辺の景色は、子どものころの思い出や家族との温かい記憶であふれ、心のよりどころとなっている古里

真田 伝統芸能の力にも注目したい。小学生の時に避難者がある県外で伝統の踊りを何度か披露した。見る側も演じる側も古里を思い出す良い機会となるし、絆が深まる。



たなか・あいる ふたば未来学園高校在学。
2020年の双葉郡研修事業に参加



さかい・かすみ 相馬高校卒。秋田県の大学に進学。
2018年のベラルーシ研修事業に参加

正しく恐れるために

— 震災から10年が経つのに放射能に対する不安の声は今も根強い。どんな取り組みが必要か？

酒井 住民の帰還を加速させるためには「双葉郡は危ない」というイメージの払拭が不可欠だ。2018年に研修で訪れたベラルーシでは、現地住民が客観的な事実を踏まえて放射線と向き合っていた。一方、日本人は放射線に対し感情的になっている印象が強い。さまざまな情報を見極めながら冷静に判断したい。

山田 確かに、ベラルーシでは幼いころから放射能について学んできた。福島県内では原発事故が起きてからしばらくの間、「危ないから外で遊んじゃダメ」という言葉が飛び交った。科学的な根拠を理解し、正しく恐りたい。

荒川 中学校では放射能に関する全体授業があったが、年に1回ほどだった。私も原発事故で避難を経験したにもかかわらず、自分から知

識を得ようとしていたかは疑問だ。積極的に学びたい。

廃炉産業と移住促進が鍵

— 被災地に住みたいと思えるような仕組みづくりも必要だ。アイデアは？

古橋 2019年に英国の原子力関連施設が集まる「セラフィールド」を訪れた。過去に深刻な原子炉火災が起きて100年以上以上の廃炉計画に挑む現場は、今や地域の若い世代の憧れの職業となっていた。施設の近くには廃炉の人材育成に特化した教育機関があり、そこから即戦力が輩立っていた。ネガティブなイメージが付きまとう福島第一原発の廃炉も大きな産業にしなければならぬ。

清信 確かに、人を呼び込むためには働く場所を確保することが大切だよね。特に若い世代の移住を促すためにはお金を稼げる生活環境の構築が前提となる。多くの雇用を生み出す大企業も誘致してほしい。

真田 元々住んでいた住民は避難先で子どもが進学するなど生活拠点ができてしまい、「帰りたいけれど帰れない」といった悩みを聞く。そこで、移住者を呼び込むとする取り組みも加速しているようだね。

田中 いわき市から広野町のふたば未来学園に電車で通学しているが、車窓に流れる海の美しさに見とれてしまう。こうした都会にはない自然の豊かさをもっとアピールすれば、移住を考えている人の背中を押すきっかけになると思う。

酒井 確かに、都会をまねた街並みを形成しても意味がない。



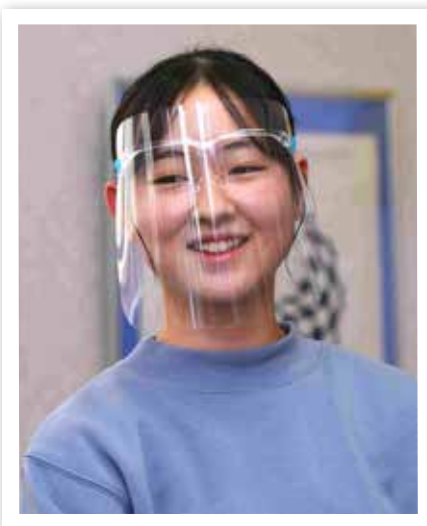
津波で大きな被害を受けた楢葉町沿岸部＝2016年

つまり、世の中に似たような街はいらない。「田舎つてうらやましいな」と思えるような特色のあるまちづくりを進めていきたい。

古橋 最近、政府が福島第一原発周辺へ移住する人に対し、最大200万円を支給する制度を創設するというニュースが流れた。でも、お金目当ての移住者はいつかは去ってしまうだろう。「住みたい」と決意して移住してもらえよう地域の魅力アップが課題だ。

荒川 人間関係もとても大事な要素だ。私は東京に避難した時、古里の広野町と比べ隣人ら人とのつながりの希薄さを実感した。移住者と地域住民との懸け橋になり、地域に根強く習慣などを教えながら、楽しく生活できるようにサポートする。そんな「面倒見の良い人」に力を発揮してもらうことが、県外の人の移住と定住につながる鍵を握っているのだと思う。

山田 その視点は大事だね。大学進学で実家のあるいわき市を離れてみて、地域コミュニティーの大切さを実感した。近所と良好な関係を築くことも安心して暮らすための鍵を握る。



きよのぶ・さき 相馬高校卒。宮城県の大学に進学。
浜通りに桜並木をつくる「ふくしま浜街道・桜プロジェクト」に参加



やまだ・れいか 磐城高校卒。福島県内の大学に進学。
2018年のベラルーシ研修事業に参加

若者の共感を呼ぶ工夫を

「風評被害はいまだに根強い。どう立ち向かっていく？」

清信 福島県は10年間も対策に取り組んでいるのに、風評被害は続いている。以前、東京の知り合いに「福島の産品は安全だっことを知ってる？」と尋ねたら「知らない」と言われた。東京では県産品の安全性を報じるニュースが少なくなっているのかもしれないし、このまま忘れ去られてしまうことが怖い。時間の経過だけが

解決してくれるのかなとも思ってしまうが、国を挙げてもつと本腰を入れた取り組みを進めてほしい。

古橋 ニュースで盛んに報じられて注目を集めている放射性物質トリチウムを含む処理水が、海に流されることになれば風評は拡大するだろう。科学的には「飲んでも大丈夫」と言われているが、それだけで理解を得られるのか疑問だ。実際に飲む人はいないだろうが、それでも実験の過程や成果を示して「飲めるほど安全」の根拠を裏付けがほしい。

山田 行政頼りではなく、私たちも風評払拭の力になりたい。大学のサークルで全国の小学生に福島について知ってもらおう活動に取り組んでいる。先日はオンラインでイベントを開催し、福島のモモなど特産品を題材に福島を発信した。小学生が楽しみながら福島の現状について学べば、保護者も福島に興味を抱いてくれるかもしれない。時間は掛かるかもしれないが、地道に取り組んでいくことがいつか実を結ぶと信じている。

真田 SNSも積極的に活用したい。先日、Instagramで福島県のオリジナル米「天のつぶ」の写真とともに、実際に味わった感想としてそのおいしさについて投稿している同世代の人がいて、かなりの反響があった。地域の特産品を広く発信したい場合、時として行政よりも若い世代の方が信ぴょう性や共感を得られる場合があるのだと知った。何のしがらみもない私たち若い世代が、同世代の仲間に紹介したいと思えるような方法も考えてほしい。

どうなる？ 将来のエネルギー

「福島県は原発に依存しない社会を目指している。今後のエネルギー政策の在り方についてどう考える？」

酒井 原発はゼロにする必要はない。福島県は、2040年ごろに県内エネルギー需要に対する再生可能エネルギーの占める割合100%を目指している。だが、再生可能エネルギーは天候にも左右されるし発電が不安定だ。原発は安定して大量の電力を生み出すことができる。

荒川 私も原発はあってもいいと思う。再生可能エネルギーだけでは頼りないので、原発とどちらも活用するべきだ。

清信 原発はいらない。確かに安定して発電できることは分かっているが、私たちは原発事故が起きて今も苦しんでいる。仮に古里の近くで原発がまた動くとして、もう一度事故の危険性があるものと向き合っているのか。絶対に避けるべきだと思う。

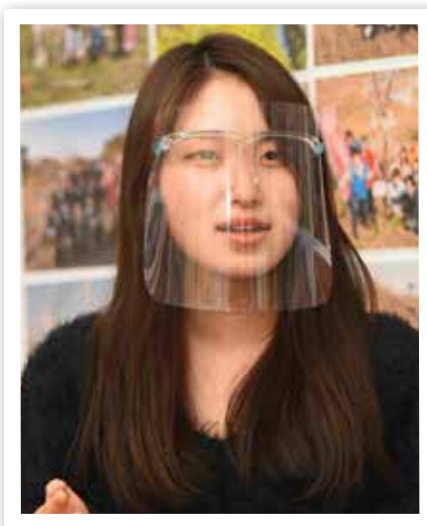
山田 ベラルーシは深刻な放射能汚染で苦難の道を歩んできたにもかかわらず、経済の発展を優先する姿勢から新しい原発を建設していて非常に驚いた。福島では原発事故で多くの人が避難を余儀なくされた。それだけに、多くの県民は国内の他の地域にある原発であっても再稼働の動きには敏感だろう。国が違えばエネ

ルギー政策に対する考え方が大きく異なることを知ったし、日本でもいろいろな意見があるのかもしれない。

古橋 将来のエネルギー政策がどの方向に向かっているのが正しいのか。私は今の段階では正直、答えが分からない。原発や再生可能エネルギー、火力発電などさまざまなエネルギーのメリットとデメリットについて理解を深めながら、今後も向き合っていくきたい。



処理水の保管タンクが並ぶ福島第一原発



さなだ・みゆ 原町高校卒。宮城県の大学に進学。
2018年のベラルーシ研修事業に参加

山田 くしくもコロナ禍で改めて注目を集めたオンラインを活用し、私たちの目線で福島の観光の魅力を全国に広めたい。古里には美しい星空と海、どこか懐かしい田園風景があ

と共通しているのは、再び笑顔であふれる古里であってほしいということだ。私たち若い世代の強みは行動力があるということ。大学に進学し、より多くの人とつながる機会が増えた。まずは県外の人に福島の魅力を伝えながら、古里再生に貢献したい。

酒井 復興の定義は何かと考えを巡らせると、浜通りの住民一人一人が異なる思いや願いを持っているのだろう。例えば、一日でも早い廃炉の実現もそうだし、かつての様に人口が元通りになることを願う住民もいる。震災前よりも便利な生活環境の整備を望む声も聞かれる。ただ、きつ

—若い世代が将来の復興の力となる。
思い描く未来のために



ふるはし・こう 新地高校卒。宮城県の大学に進学。
2019年に英国研修事業に参加

る。県や国が発信する観光情報では網羅しきれっていない知る人ぞ知る魅力を紹介できれば。そして、放射線量も大きく下がり、古里は安全だということも自分の言葉で地道に発信していきたい。

古橋 都会の人たちを呼び込んで、にぎわいを生み出したい。個人的にはお米のおいしさが誇り。そうした食の魅力も発信していきたい。



清信 将来は小学校の教師になりたいと考えている。そして、防災やまちづくりについて学んだ知識を伝え、未来を担う子どもたちをサポートしたい。未来の日本がより良い方向に向かうことを願いながら。

田中 避難した住民が戻ってきた時に「古里つてやつぱりいい所だな」としみじみと感じてもらえるような将来が理想だ。そのためには、どうすればいいのか。今はまだ漠然としたアイデアしかないが、古里の風景を残すということの一つのキーワードになるの

かもしれない。震災後、被災地には次々と新しい建物が誕生し、風景は目まぐるしく変わる。その中でも残すべき風景について、住民の一人として真剣に考えていきたい。

真田 震災と原発事故の教訓がしっかりと受け継がれていくことを願う。2019年には東日本台風が発生し、古里に大きな被害をもたらした。いつまた貴い命を奪ってしまう災害が起きるのは誰にも分からない。だからこそ「3・11」の教訓が

生きる。私たちは成長し、大人に守られる立場から、誰かを守る世代になった。必ず教訓を伝えていく。

荒川 誰もが当たり前の生活を送ることができるようになってこそ、復興を果たしたと胸を張って言える。私が暮らす広野町も津波で大きな被害を受けたが、一歩ずつ復興に向けて足跡を刻んでいる。高校の授業では古里の課題を見つめ、解決するための方法について考えている。双葉郡について、他の地域に住む人も自分の事として考えてもらえるような取り組みを進めたい。これからの古里の未来は私たちが創っていく。

つながる心を力に 逆風をはねのける

みなさんは水俣病をご存じだろうか？かつて熊本県水俣市の化学工場チソンがメチル水銀を含む排水を海に流し、汚染された魚介類を食べた住民らが手足のしびれ、視野狭窄などの神経障害を発症した公害病だ。1956年に国は被害を公式確認したが、当初は伝染病と疑われ、多くの犠牲者を生み、患者や家族は差別や偏見に苦しんだ。それから60年以上。今もなお水俣病を巡る混迷は続く。公害による実害と風評被害に苦しんだ歴史は、東京電力福島第一原発事故から10年の歩みと重なる。私たちは古里再生の力となる取り組みを探ろうと、水俣市で奮闘を続けるお茶農家と漁業者にオンラインを使って話を聞いた。

お茶農家



松本 和也 さん

Q 風評被害とどのように向き合ってきたか。

A 水俣病が発病し、40年以上経つてからやっと『水俣産』と胸を張って言えるようになった。それまでは、水俣産とは言えなかった。今では、無農薬をアピールポイントとして日本や世界中の人に発信している。そしてたくさんの人に美味しいと思ってもらいたい。

Q 現在、水俣産のお茶の全国的な知名度は高くなったのだろうか。

A そんなに高くなったとは思わない。知っている人は知っているという感じだ。インターネット

Q お茶を活用した新しい取り組みはあるか。

A 地域とコラボレーションした商品は少ない。しかし、東京のパン屋で紅茶やほうじ茶、抹茶を使ったケーキやシュトレンを作って販売している。今後はチョコレートを作っているモロゾフとほうじ茶のチョコレートを作ってもらう予定だ。

Q 水俣市がどんな場所にあってほしいか。

A 水俣病を経験して環境や健康に力を入れた取り組みをしている。紅茶に関しては、世界や全国で有名になってきていて、市や県も紅茶の実行委員会を作って動いてくれている。例えば、紅茶のイベントがあれば市がスタンプやお金を出して協力してくれる。一方で、食べ物や市が積極的に行動をしているわけではなく個人に任せている。だから、食べ物に関しての取り組みを増やしてほしい。また、自然栽培などの条例を作って応援するなどをしてほしい。

Q 水俣病と向き合ってきた過去を次世代に伝え続けることは。

や通販で販売をしているのでもちろん徐々に知名度は高まっており、『無農薬のお茶でおいしいのは初めてだった』という評価の声もある。しかし、まだみんながみんな知っているわけではない。そのためこれからも地道にコツコツと水俣の茶をアピールしていきたい。

Q さらに購入してもらうための方策は。

A 究極のお茶を作っていきたい。自然栽培や無農薬はすでに取り組んでいるので、今後も継続していきたい。他の農家のお茶も無農薬栽培することがアピールの強みとなる。



A 小学校や中学校で地域のお茶を知ることや環境、教育の授業、NHKの動画などを見てもらうことで水俣に生まれた誇りを持ってもらういいことになっていく教育をしていくことが大切だ。また、商品販売をしていく上で人と関わる機会が多いため、自身も伝えるべきだと思った。3、4年前から学生などに伝える活動をしている。

Q これからどういう取り組みをしていきたいか。

A 自然栽培や無農薬はすでに取り組んでいるので、今後も継続していきたい。他の農家のお茶も無農薬栽培することがアピールの強みとなる。

A テレビや新聞は利用せず、地道に取り組んでいくことが大切だと思っている。メディアを使うとお金もかかる。一気に世の中にアピールするとすぐに商品がなくなり、一時的な盛り上がりで終わってしまう。そういう意味では、インターネットでたくさん商品売れれば良い訳ではない。人とのつながりを大事にしてコツコツと商品を広めていく。

Q 活動する際に大切にしていることは。

A 相手を嫌な気持ちにさせない。人柄を前面に出し、思いやりの気持ちをもって接していくようにしている。

Q 将来を担う若い世代に求めることは。

A 阪神淡路大震災の時、ボランティアに行った。行く前は若い人たちがあまりいないと思っていたが、実際は多くの若い人がいた。そこまでの行動を望む訳ではないが、そういう気持ちのある若者たちよ、思う存分にチャレンジしてほしい。

Q なぜブランディング戦略として「口コミ」を重視しているのか。

A マーケティング分野で一流と言われる多くの人の話を聞き、こつこつと地道に取り組んでいくことが大切なんだと実感した。1番大事なのはおいしさ。2番目が適正な価格。安全や安心は当たり前。20歳で地元に戻った時は親の言う通りに化学肥料を使って栽培していたが、病気も虫もなくならないし、どこかややもやしている自分がいた。無農薬栽培についても自分で納得するまで学び、少しずつ胸を張って売り出せるようになった。

差別を乗り越えて 夢と希望抱き前へ

漁師・語り部



杉本 肇 さん

Q 「水俣病」は「今はもう終わった病気」というイメージが強いのですが、どう捉えているのか。

A 当初の水俣病は、周りの人々からバカにされたり、お金のために申請しているなど、批判される病気があった。だからこそ、患者申請が難しい時期もあった。しかし、最近になってようやく申請をできる人が増えてきたが、なかなか終わりは見えないと感じている。むしろこれからだ。実際の水俣病の患者さんは6万人ほどいるとされるが、実際に認定された人はわずか3千人ほど。認定申請を巡り今も裁判が続いている。「歴史の継承」の観点からも子どもたちに起きた出来事をそのまま伝えていきたい。

Q 裁判で戦っている人々がいる。しかし、申請が認められるのかは分からないし、これからは長い戦いになると思う。このように答えや目標が明確に定まっていない状態の中で、語り部を続けられるモチベーションは？

A 私は裁判で戦い続けることを諦めてしまった。精神的にもきつい。しかし、語り部など水俣病に関する活動を続けてきたことには理由がある。

Q チッソに対する当時と今の思いは。

A 私の母、父、おじいさん、おばあさんは4人とももう亡くなっているが、4人とも重症で障害があった。水俣病によってだった。けれども一番つらかったことは、父も語り部になったのだが、背景にあるのは病気の差別だと言っていた。この差別こそが水俣病の一番のダメージである。私たちは考えている。なので、そもそも病気の原因であるチッソ工場に対し第一次訴訟を起こし、水俣病に認定されたが、そのことよりも差別がつかかった。それでも、例えばチッソを恨むかという点、私はしないと断言できる。だが、ここにも色々な考え方があって、恨み続けるという人もいるし、発生から長い年月が経っているのに色々な考え方があって良いと思うが、私たちがつらかったのは病気でなく差別だった。差別を何とかなくしたいというのを言い続けている。そのため大事なのは許すということ。小さいころからそう言われていたのでチッソを恨み返すことはない。簡単に許してはいけないと思うが、水俣はチッソからいろいろな恩恵を受けてきたので、この歴史を変えるためには患者とチッソが歩み寄りというか、お互いに同じ方向性を向けるというのが正しい生き方というのではないか。

ある。当時は政府の援助を含め何も無い状況の中、支援に来てくれたのは大学生のボランティアだった。そのような人たちが患者の家に泊まり込んで、料理を手伝ってくれた。サポートはもちろん、思いを聞いてもらうことは非常に力強かった。「人とのつながり」は大切だと思う。

Q 福島第一原発を経験した一人として、教訓を次の世代に伝えていきたい。そのための心構えを教えてください。

A まず「事実」を伝えることが大切である。つまり、あったことを曲げないで伝えること。水俣病だった両親からは「生きる覚悟」を強く感じた。また大きな夢や希望を持つことが大切だ。



Q 水俣市は当時より差別などの状況が改善されたと思うが、現在に至るまでに良かったと思える活動は？

A 水俣市は被害者と加害者が同居する町だ。このことで水俣市民は発生当時から誰も「水俣病」という言葉を口にできなかった。裁判をやっている中で、「水俣病」という言葉は水俣市民に語らないし、語れない」という状況が続いた。水俣は公害病で苦しんだけれども、チッソの恩恵にもあずかっていた。複雑な心境とともに、この問題を表立って出す必要もないし、水俣市民には口をつぐんでおこうという風潮が広がった。ただ、内なる差別があった。「あの人は認定されたからお金をもらっている」など水俣市民からの差別。大阪や東京の人に「水俣から来たから水俣病じゃないの？」と外の人からの差別もあり、心を痛めたし苦しかった。それを変えたのは平成6年にできた水俣資料館だ。語り部の濱元二徳さんが、水俣病の被害はパネル展示や映像を流すだけでは

Q 漁業の風評払拭に向けた取り組みは。

A 当初は原因が分からない病気だったため、患者さんは10年以上、病気よりも差別を恐れてきた。漁業に関して、当初はメチル水銀が流れてしまったという事実があったため、風評被害とは言えなかったが、その後、チッソがメチル水銀を流すのをやめても魚が売れない状況が続く、長い風評被害に苦しむこととなった。魚が全く売れない、売ってはいけなかった。約40年間続いた。さらに「水俣湾の魚は汚染されている」と非難され、1978年〜1996年まで水俣湾を魚が行き来できなくなるように5km以上を網で囲っていた。水俣湾以外の魚は食べられるようになったものの、水俣湾は厳しい状態が続いていた。そのため、ミカンの栽培を始めたが売れなかった。関係のない農産物までもが風評被害を受けてしまうこととなった。1996年からは魚の水銀値が減ったため囲いを取ることが許され、やっと水俣湾の魚が売れ始めた。その後も農産物は無農薬にするなどして、人にやさしく、安心で安全な商品としてPRし続け、今日に至っている。

分らないと、語り部を自主的に行っていた。そのことを小学生、先生が聞き、学校側が水俣病について学ぶ姿勢を見せた。「あったことをちゃんと学ぶ」ことは、とても重要なことだと気づき始めた。過去の失敗、負の遺産は未来につながらない。環境を破壊された水俣だからこそ、環境に配慮する町になろうと市民一丸の活動が始まった。例えば、ごみの分別や学校ISOなどの環境に配慮するようなまちづくりを考えた。水俣資料館ができて29年経つが、現在の学生は水俣病を恥じることなく、胸を張って伝えられている。「あったことをちゃんと伝える」と「学びが力になる」ことが現在水俣で感じているところだ。

Q 福島へのアドバイス。

A 福島と似ている点は「日本が汚される点」と「地方が都会のためになんて汚されるのか」という点だ。だからこそ強く思うのが「地方にいる人間は騙されてはいけない」ということ。そのため、地方の人々が常に声をあげることが必要だと強く感じている。その点では、水俣は声を上げた。例えば訴訟などを起こした点は誇りである。地方は静かすぎると感じていた。日本人は声を上げることが苦手である。自分自身も当初は「水俣病」ということを公表できなかった。つまり声を上げられなかったから、後悔している。だからこそ、これから語り部などを通して声を上げていきたい。

水俣の教訓心に刻む

■清信 早希
恨まない心を次世代へ
「恨み返さない」という言葉が特に印象に残った。家族が病気になる、体が不自由になり、ひどい差別を受ければ、誰もが相手を恨んでしまおうだろう。それでも、杉本さんは小さいころから許すという考えを持っていたことに感銘を受けた。

東日本大震災、東京電力福島第一原発事故の被害を受けた福島県と、水俣病が流行した時の水俣市の境遇はとても似ていた。それは、被害者を傷つけている一番の原因が「言葉」であるという点である。私は古里・福島県が好きだ。震災当時、「福島は汚い」などと県外の人から言われていることに憤りを感じた。

■荒川 礼奈
ありのままを伝える
差別は小さくしなければならぬ。水俣病による差別は、とても苦しくつらい思いをしたと思う。原発事故により他県に避難した子どもがいじめられていたという問題と重なる。差別は、正確な知識がないから起きるのだと思う。

だからこそ、福島県も水俣市のようにあったこと、事実を私たちが責任をもって後世に伝え、学んでいくことが大切だと思いました。また、震災で途切れてしまった人と人とのつながりを取り戻し、差別や風評被害でこれ以上苦しむ人が増えず、誰もが当たり前の生活ができる双葉郡、福島県になってほしいと強く願う。

漁師・語り部 杉本肇さんの話を聞いて



しかし、杉本さんの話を聞いて自ら行動し、外部に発信することによって、悪いイメージを払拭できるのではないかと改めて思った。私は将来、小学校の教員になりたい。小学校という学びの初めの段階から、勉強はもちろん、偽りのないありのままの震災や原発事故、福島のことを伝えていける教員になりたい。

■山田 玲華
絆を紡いでいく
誰のことも恨まない。杉本さんの母親は「人とのつながり」を非常に大切にしていたという。自分以外の身の回りの人を大切に考えるからこそ、誰も憎まない考えが持てるのだろう。今の社会は、自分がリスクを負えばその代償を周りに求める人たちが多くいると感じる。その背景には「人とのつながり」を大切にしている習慣が薄れていることが関係しているのだと強く思った。情報化社会が急速に進む中でも、対話を大切に絆を紡いでいきたい。

■田中 愛琉
難局きつと乗り越える
覚悟と希望を持ち、事実から何を感じたかを伝える。そんな杉本さんの言葉に勇気付けられた。自身や家族が被害を受けたからこそ、杉本さんの言葉には説得力があり、そして重みがあった。

風評被害や差別の問題に、これからも私たちが向き合っていかなければならない。福島でも震災後に差別が身近にあったが、水俣市の人たちが過酷な実害と風評被害に向き合い、努力を続けているように、私たちも一生懸命に未来へ歩いていく。

福島に未来を生かす

お茶農家・松本和也さんの話を聞いて

■真田 未夢
若い世代が古里をアピール
「人柄が大切」という言葉が心に響いた。そのため、実際に福島に足を運び、生産者と触れ合ってもらうことが風評払拭の近道になるのではないかと。つまり、安全を確保するためのこだわりなどについて直接話を聞けば、消費者の安心につながると思った。

では、どうすればより多くの人に福島を訪れてもらえるのか。福島県や復興庁はホームページで被災地を含め双葉郡の特産物や観光情報を発信している。でも、SNSによる情報発信の強化やホームページのレイアウト内容の充実など、特に若い世代の関心を引き寄せる工夫が必要だと感じた。「応援したいな」と若い世代に広く共感と賛同の輪が広がれば、特産品などをSNSで拡散するなどPRする際の力となる。

■荒川 礼奈
私が伝える力に
若い人がもつと古里のためになる行動をしていくべきだ。例えば、双葉郡の風評被害を払拭するために、食べ物の安全性を自分の言葉で消費者の相手に直接伝えたりしていかねばならないと思う。過去の経験や歴史を伝えることも大切だが、これからの未来の双葉郡を考えていくことも必要だ。

全国や世界の人に伝えるためには、松本さんのように地道にコツコツ頑張っていくしかないかもしれない。ゼロからスタートしなければならぬ。



■田中 愛琉
応援の輪を広げたい
とても人との繋がりを大事にしている人だと感じた。SNSやメディアが主流になっている

らなかつた双葉郡だからこそ、たくさんの人との協力や他者から学ぶことが今後ますます大切になってくる。

■酒井 郁澄
つながりを大切に
消費者との関係を大切にするからこそネットでの販売や広告宣伝を行わず、直接販売に力を入れていた。不特定多数の多くの消費者と関係を持ちたいのではなく、顔が見え、直接対話する。そして、消費者と生産者の関係だけではなく、人と人との関係を築きたい松本さんのような生産者は、近年少なくなっている印象があるので、話を聞けたことは貴重な経験だった。

「水俣病」という言葉から逃げずに、むしろ真正面から立ち向かいアピールしたからこそ、ここまで有名になったのだと感じた。事実を隠さず後世に語り継ぐ。不満があれば訴訟や裁判を起こし、自分の意見を発する「水俣」の人々の行動を、僕たち福島県人は見習うべきだと強く感じた。松本さんは、人生に満足していた。

今の社会で、あえてそうした媒体に頼らず地道にアピールを続ける姿勢に、水俣市産のお茶に誇りや愛情を持っているのだと感じた。水俣の風評被害は完全に払拭できたわけではない。

それでも受け入れてくれない人に無理に共感を求めるのではなく、水俣を応援してくれる人に対して積極的にアピールしていく取り組みは、今後の福島風評払拭につながる一つの道となる。そして、常に人を思いやる気持ちや人柄を打ち出し、他の人を大事にしていく気持ちは、今後、私たちが古里復興に向かう上で大事にしたい心得となった。

公害の原点を知る

〈もっと知る〉

Q&A

Q そもそも水銀って何？

A 鉄や金、銀と同じ金属の仲間だよ。常温で液体のただ一つの金属なんだ。私たちの身の回りでは、蛍光灯や水銀体温計、水銀血圧計、一部の電池などに入っている。

Q どうして水銀に気をつけなければいけないの？

A 水銀は環境中に排出されると自然界を巡るようになり、時には魚など海の生き物の体内に取りこまれたりするんだ。その魚などを人が食べると、水銀が人の健康に悪い影響を与えることがあるんだよ。

Q 水俣病ってどんな病気なの？

A 工場から流された水に入っていたメチル水銀が魚にたまって、それを食べておこった病気だよ。手足のしびれや目の見える範囲が狭くなるなどの症状が出る。お母さんのおなかにいる間に、水俣病になってしまった人もいたんだ。

Q 水俣条約では具体的にどんなことに取り組むの？

A 水俣病の教訓を踏まえ、2013年に熊本市と水俣市で開かれた外交会議で採択された国際環境条約なんだ。水銀で地球をよごさないよう、世界の国々が一緒になって取り組むための約束だ。

(環境省HP参照)



■ 百間排水口
水俣病の原点の地。この排水口を通じ、メチル水銀が海に流された。排出された水銀量は約70〜150トン、あるいはそれ以上とも言われ、排水口付近に堆積した水銀を含む汚泥の厚さは4メートルに達する所もあった。熊本県は1977年に公害防止事業に着手。約14年の歳月と総事業費約485億円をかけて水俣湾に堆積した水銀を含む汚泥の除去や埋め立てを行った。現在、百間排水口からは浄化処理された工場排水や家庭から出る生活排水などが流れている。



■ エコパーク水俣

水俣湾を埋め立てて造られた公園。面積は58畝と広大で、芝生の広場やバラ園、テニスコートなどが並ぶ。



■ 水俣病慰霊の碑

水俣病で犠牲になった人を慰めるために建立された慰霊碑。悲劇を繰り返さないという誓いが刻まれている。

歴史と歩みを学ぶ

水俣病の歴史とこれまでの歩み



水俣市

熊本県の南端、鹿児島県との県境にあり、西は八代海(不知火海)に面している。日本の地中海とも呼ばれる温暖な日差しが特徴で山と海の恵みが豊富

水俣市のチツソという会社の工場が、メチル水銀という人の体に害のある物質を含んだ水を海に流したために起きた病気です。メチル水銀はプランクトンなどに取り込まれ、それを魚が食べ、さらにその魚を水俣に住む人たちが食べました。

このような食物連鎖を経て、水俣湾の近くに住む5歳と2歳の姉妹らが原因不明の病気にかかり、保健所に報告されました。1956年5月1日、水

俣病は公式に確認されました。「公害の原点」とも呼ばれています。

国が水俣病を「公害病」と認めたのは、最初の患者が確認されてから12年も経った1968年のことです。その間も工場の操業は続き、メチル水銀はずっと海に流されていました。国や県が規制をしないなど対応が遅れたことで被害が大きく広がってしまったのです。

1973年には水俣病の患者がチツソに損害賠償を求めて起こした裁判で、その主張を裁判所がほぼ認めて勝訴しました。国が水俣病と認めた患者には最大1800万円が払われるよう

になりました。ただ、基準に当てはまるための条件が多く、強い反発もあったのです。

そこで、国の基準では認定されないものの、手足や全身の感覚障害を訴える被害者を救うため、一時金や療養手当を給付する新しい法律が出来ました。水俣の人は声を上げて戦い続けてきたのです。

人の貴い命よりも経済の成長が優先されてきた教訓を踏まえ、水俣市は1992年に日本で初めて環境モデル都市づくり宣言を行いました。2013年には水銀の管理や輸出入の規制などを取り決める水俣条約も採択されました。

環境に配慮した新しいまちづくりが進む中、水俣病が起きた地域では「いまだに患者への差別や偏見が残っている」と言う人もいます。東京電力福島第一原発事故からの復興を目指す私たちが、水俣病の教訓から学ぶことはたくさんあるはずですよ。



学 び の 旅 は 続 く 世 界 の 扉 を 開 く



ショッピングモールでソーラン踊りを披露。現地住民約300人を前に「福島の元気な姿」を発信した。
= 2018年7月31日 / ベラルーシ・ミンスク



福島の観光の魅力やロボット産業など新しい挑戦を含め復興の歩みを発表した。
= 2018年7月31日 / ベラルーシ・ミンスク



原発事故の影響で立ち入りが禁止されているボレーシエ放射線観光保護区のゲート前。被害の大きさを肌で感じた。
= 2018年7月28日 / ベラルーシ・ゴメリ州



現地の子もたちと踊りを通して交流を深めた。
= 2018年7月25日～26日 / ベラルーシ・ゴメリ州



書道や折り紙、けん玉など日本の文化を発信した。
= 2018年7月25日～26日 / ベラルーシ・ゴメリ州



チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシへの派遣事業のキックオフ研修に望む浜通りの高校生
= 2018年6月16日 / 広野町



世界的デザイナーのコンノミチコさんと交流した。寿司の文化を広めるなど挑戦を続けていた。
= 2019年8月14日 / 英国・ロンドン



歴史があり、世界最高峰の大学都市を視察した。
= 2019年8月12日 / 英国・ケンブリッジ



「私たちの経験が少しでも役に立てば」。ステンドグラスで、現地住民に対し震災、原発事故の教訓や復興の現

況が荘厳な雰囲気を出すセント・ジェームズ教会状を発信した。= 2019年8月13日 / 英国・ロンドン



100年以上の廃炉計画に挑むセラフィールドに入り、今後の展望に理解を深めた。
= 2019年8月9日 / 英国・湖水地方



セラフィールド近くの教育機関では放射性物質の半減期について楽しみながら学んだ。
= 2019年8月9日 / 英国・湖水地方



公害の被害を乗り越えてきた歩みを知りたい。オンラインで熊本県水俣市のお茶農家と漁師の話聞いた。
= 2020年12月25日～26日 / 広野町



天神岬公園では撤去が決まった洋上風力発電施設を沖合に望み、再生可能エネルギー推進の課題などに理解を深めた。= 2020年11月7日 / 楢葉町



東京電力福島第一原発では処理水を間近にした。
= 2020年11月7日 / 大熊町、双葉町



廃炉の課題に直面する福島第一原発に入り、現場の実態を肌で感じた。= 2020年11月7日 / 大熊町、双葉町



東京電力福島第一原発の廃炉資料館を訪れ、廃炉への取り組みや汚染水対策などについて学んだ。
= 2020年11月7日 / 富岡町

ベラルーシ研修

英国研修

双葉郡研修

英国研修事業

2019年8月6日～16日の日程で、浜通りの高校生20人が英国を訪問。同国では1957年に起きた原子炉火災を契機に、100年以上の廃炉計画に挑む原子力関連の一大集積拠点「セラフィールド」を中心に視察した。廃炉を軸とした地域活性化や人材育成について学びを深めた。



ベラルーシ研修事業

2018年7月23日～8月3日の日程で、浜通りの高校生24人がベラルーシを訪問。同国は1986年に起きたチェルノブイリ原発事故で51の村が地図から消えるなど甚大な被害を受けた。生徒たちは事故の課題と向き合う現地の有識者や住民と交流し、東京電力福島第一原発からの復興に役立つヒントを探った。





例えば、風評被害をなくすための効果的な取り組みは何か。あるいは、かつてのように住民でにぎわう街並みを取り戻すためにはどうすればいいのか。

震災から10年。復興へ向かう道の先には今なお多くの課題が横たわるが、残念ながら誰も答えを見出せていない。

もちろん、どうにかして乗り越えようと、大人たちはこれからも挑み続ける。それでも、若い世代の情熱と行動力、新しい価値観や柔軟な発想が「答えのない問い」に満ちた未来を切り拓く鍵を握っているのだと期待してしまう。

古里は復興した。そう胸を張って言える一つの指標となる福島第一原発の廃炉完了まで30年以上を要するという。その長い時間の中で、被災地や住民が抱える課題はますます複雑さを増していくだろう。

復興を見届けることなく、いなくなってしまった人たちがいる。彼らの思いを受け継ぎ、世代を超えて心一つに前へと歩いていきたい。

本誌では、若い世代が震災から10年を迎えた双葉郡の今を見つめ、半世紀以上にわたり差別や偏見、風評に立ち向かってきた水俣市の取り組みを学び、その成果をまとめた。手にしたあなたにとって、過去と今、そして未来をつなぐための道標になればと願う。



企画・発行

 特定非営利活動法人ハッピーロードネット

理事長 西本 由美子

〒979-0407 福島県双葉郡広野町広洋台2丁目1-5

TEL: 0240-23-6172 FAX: 0240-23-6171 E-mail: office@happyroad.net

制作 STAFF

高村 泰広 (新地高等学校 教諭)

辺見 祐介 (福島民友新聞社)

松本 淳 (映像作家)

田中 宏和 (前田建設工業株式会社)

これから
future

学びの歩みを
止めない

NPO法人ハッピーロードネット
理事長 西本 由美子

東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から10年を迎えました。この間、被災地の移り変わりを見つめ続けた時間は長く、それでいて瞬間に過ぎ去っていったようにも思えます。

激しい揺れによりあちこちで深く大きな亀裂が入った道路は元通りになり、津波で何もかもが流された沿岸部には新しい住居やホテルが次々と誕生しました。被災地は今、復興へと力強く歩みを進めているのを実感しています。

それでも、道路沿いに目を向けるといまだにバリエードが張り巡らされ、自宅にさえ帰ることのできない人がいます。原発周辺には除染で出た汚染土壌が運び込まれ、古里の原風景が消えつつあります。廃炉に向けて最大の課題となる溶け落ちた核燃料を取り出す方法については手探りの状況が続く、農家が汗を流して育てた農作物に対する風評被害も根強く残っています。

かつての日常を取り戻すためにはどうすればいいのか。大人たちが解決への道筋を示さなければならぬと思いつながら、限界を感じてしまう時もあります。復興への道のりは長く険しい。世代の交代はとどまることなく進む。子どもたちにとって重荷だと分かっているながらも、古里の未来を担ってもらわなければなりません。

そんな思いで、私たちは復興のリーダーとなる人材の育成に力を注いできました。これまで福島と同様に原子力災害を経験したベラルーシと英国に県内の高校生を派遣して参りました。2020年の派遣先は、水俣市の被害に立ち向かう水俣市を予定していました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により中止を余儀なくされました。それでも、参加を希望していた生徒の一部から「水俣について深く知りたい」と申し出がありました。

そんな願いに応えたいと、オンラインを使って水俣市と福島を結びました。ベラルーシや英国を訪れたかつての高校生たちも大学に進学しましたが、古里の将来に生きる知識を求めて参加してくれました。

子どもたちが自ら学ぶうとする意志を決して無駄にしない。コロナ禍の収束の兆しはまだ見えなけれど、私たちは知恵を絞り、人材育成に向けた歩みを止めない。震災から10年の節目に、改めてそう誓います。